

2024 年度

第 11 回ブックショートアワード

観月橋

かぐやま
香久山 ゆみ

■ 作品タイトル・・・観月橋

■ 元にした作品のタイトル・・・なし

■ 著者名・・・香久山 ゆみ（かぐやま ゆみ）

■ あらすじ(140 字)

毎年中秋日に開催される、住吉大社の観月祭。何年もの間欠かさず私が訪れるのは、かつて恋人と約束したからだ。将来を誓いこそしなかったが、愛し愛されていた。そう信じたけれど、今年も彼は現れない。諦めかけた時、「お待たせ」と肩を叩かれる。

■ 文字数・・・2,482 字

観月橋

仕事を終えて急いだけれど、到着した時には予定の十八時を回っていた。

鳥居をくぐると、溢れんばかりの人ばかりだが、さいわい祭事はまだ始まっていないようだ。観覧席は当然すでに埋まっているが、空いているスペースを探しながら人の間を進む。あの人が先に着いて待っていやしないか。そんなことを考えながら。そんなはずはないのに。

結局待ち人を見つけることはできぬまま、観覧席脇の空間に何とか居場所を作る。運よく立ち見の最前列に潜り込めて、篝火に照らされた太鼓橋がよく見える。

もう何十年と中秋の日を迎えるたびに見つめてきた景色だ。

住吉大社の観月祭。毎年中秋日に開催される。初めて連れてきてくれたのはあの人だった。まだ日のある時間に訪れて、参拝した。五所御前の玉垣で、彼は「五」「大」「力」の文字が書かれた小石を真剣に探し出して、三つ揃えてお守りにすれば心願成就するのだと言ってにかっと笑った。「お前は集めへんのか？」と訊く彼に、「だって願いが叶ったら倍にして返しに来なあかんのやろ。面倒くさいもん」と素直に答えると、「夢があるんかないんか分からん奴や」と苦笑した。

私は石ころよりも、太鼓橋の前の男女が気になって仕方なかった。前撮りだろうか、婚礼衣装のカップルは幸せそうに微笑み合っていた。いつか私達も。そう思ったけれど、石ころ探しに夢中の彼にはついに言えず仕舞いだった。

近所の定食屋で軽く食事をしてから、再び境内に戻った。

彼がビールを三杯もお代わりするせいで、すでに祭事は始まっていた。端っこの隙間から太鼓橋の上の幻想的な踊りをうっとり眺める。「きれいやね」と彼に視線を遣ると、柱にもたれかかってうつらうつらしている。呆れたものの、例の「五大力」のお守り袋だけは落さないようにぎゅっと握りしめている様子を見て、妙な安心感を得たものだった。

「ちゃんと最初から見られへんかったし、あんた寝てたし。また来年も一緒に来よな」

帰りのチンチン電車で彼の肩に凭れながら言うと、「ああ」と彼は返事した。

その後、自然消滅というのか、彼と連絡がつかなくなり、それでも約束の観月祭には来るのではないかと、万障繰り合わせて毎年この場所を訪れる私は阿呆だ。付き合っていた当時も、彼が約束を守ったことなんて一度もなかったのに。けれど、愛されていると信じていた。あの日必死に探した「五大力」の石に掛けた願いに、私との未来を託していないなど考えられなかった。

「反り橋に月は巡れど彼は来ず」

観月橋

はっと顔を上げる。

いつの間にか太鼓橋からまるい月が昇り、祭事が始まっている。

太鼓橋に登った神職が、俳句と短歌を披講する。一般の公募から選ばれた十本程がろうろうと発表される。

聞き間違いだろうか、手元のパンフレットを開く。反り橋に月は巡れど彼は来ず。——いま読まれたのは、確かに私の投句だった。

ああ。

毎年観月祭に足を運ぶ私は、理由を求めた。俳句を奉納するようになった。もしもいつか自分の俳句が選ばれたら、その時はもう彼の姿を求めて来るのはやめようと。ついに、ついに選ばれてしまった。

ふっと脱力する。安堵なのか失望なのか自分でもよく分からない。ただ、四半世紀も続けた人待ちが今夜で終わるのだ。

「ごめん。遅くなった」

ふいに肩を叩かれてびくっと振り返る。

「先輩に仕事を頼まれちゃって。新人はつらいよ」

娘が溜め息混じりの笑顔を作る。

そうだ。今夜は一人じゃなかった。毎年適当な理由をつけて一人観月祭に足を運ぶ私の様子を、そんなに素晴らしいものなら自分も一緒に観たいと娘が言った。それまでは「子どもには楽しくないかもしれないから」と言い訳していたのだが、もう断る理由も見つからず承諾したのだった。

「あっついね」

九月も中旬の夜だというのに、今年はまだ暑い。急いできたのだろう、汗を拭う娘に「お茶でもいただく？」と誘い、観覧席の隣に設えられたお茶席に入る。

ちょうど太鼓橋がよく見える席に案内される。太鼓橋では、少女達の住吉踊りが終わり、舞楽奉納が始まる。

茶席で、巫女さんが呈する月見団子とお抹茶をおしいただく。

「思ってた『お茶する』と違った」と娘はやや緊張の面持ち。「お茶碗を掲げてから、正面を避けるため二回まわすのよ」と教えてやる。「へーえ」と娘が感心する。茶道は彼と別れた後、結婚前まで習っていた。

笛の音が響き、娘がじっと舞台を見つめる。舞人が登場して、鉦で太鼓橋の上の邪気を

祓う。清められた空間に、聖なるものが降りてくる。と思っているのかどうか、普段がさつな娘もすっかり静かだ。幼い頃はとんでもないやんちゃ娘だったのに、立派に成長したものだ。まだまだ心配することも多いけれど、初任給で焼肉をごちそうしてくれた時にはうっかり泣きそうになった。

——そうか、もしかしたら。彼の願掛けは「私と幸せになりますように」ではなく、「私が幸せになりますように」だったのではないか。彼はギャンブルが好きな人で、一緒になったらきっと苦労しただろう。今のような安らかな幸福はなかったに違いない。

中秋の月に照らされた太鼓橋の上では、現在と過去を繋ぐように悠久の舞いが展開される。夢ともうつつとも分かぬ心持ちで、ぼんやりと夢幻の世界を見つめる。

太鼓橋から舞人が去り、静かな夜天に笛の音が響く。舞の終わりを表す長慶子が演奏され、まるで夢から現実に戻ってきたような錯覚をする。

ああ、終わったんだ。

感慨に浸っていると、娘が言った。

「めっちゃ良かった！ 仕事のイライラが浄化された。来年もまた来たい」

無邪気に言う。

「昼間の住吉さんも面白いねんで」と娘を唆す。今度こそ私も「五大力」の石を探してみよう。彼の筆跡の小石を見つけるかもしれない。けど、願うのはきっと彼のことで私のことでもない。

この子がこの先も健やかに幸せに過ごしますように。

私の幸せは、私で何とかしますから。そうだ、次は短歌の奉納に挑戦しよう。献歌に選ばれるまで、娘はついて来てくれるだろうか。

「反り橋に月は巡れど彼は来ず 我も待たぬぞ星を得たりて」

〈了〉